

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow

## 近江和ろうそく職人

人の心を癒す炎に、飽くなき情熱を燃やす。

大西巧氏



### Satoshi Onishi

1979年滋賀県生まれ。実家は滋賀県高島市に代々続く老舗「大興」。大学卒業後、三代目である父の命で京都の香を扱う店に3年間勤めた後、弟子入り。以来、技の研鑽に励む。

#### 近江和ろうそく(おうみわろうそく)

榎の木の実などから採れる植物性の蠟を原料とするろうそくて、江戸後期に発展した滋賀県の伝統的工芸品。見た目にも柔らかな炎が魅力とされ、燃える際のすすが少なく部屋を汚さないのも特長。



そよ風やせせらぎを思わせる炎の揺らめきで、見る人の心に安らぎを与える和ろうそく。滋賀県は京都や石川と並ぶ名産地の一つに数えられ、「近江和ろうそく」の名は古くから広く知られてきた。

大西巧さんは故郷の伝統工芸を未来に残すべく、日々修業に打ち込む若き職人。昔ながらの原料と製法を受け継ぎ、和ろう

そくづくりに取り組む職人は、今や全国でも数えるほどしかないという。

きつかけは？

大西「大学三年生のころ進路について話合った時、父の思いに胸を打たれて弟子入りを決意しました。数十年も和ろうそくづく

り一筋に生きてきた父のように、一生の仕事がしたくなつたんです」

伝統的な和ろうそくは、榎の木の実から取った蠟を用いる。石油由来の原料から作つた洋ろうそくとは、この点が大きく異なる。

製法も独特で、手で蠟を塗り込む。芯に蠟を塗つては乾かすことを何度も繰り返す。ろうそくを大きくする。すると断面が木の年輪のようになり、それが和ろうそくの証しという。また、竹串に和紙とイグサの茎を巻き、真綿で留めた太い芯も和ろうそくならではの。榎の蠟は粘り気が強く、細い芯だと蠟をしつかりと吸い上げないためだ。

手間暇かけて完成させた和ろうそくの炎は、さまざまな表情を見せながら、ゆつくりと揺らぐ。それは自然の素材にこだわり、人の手でつくつた温かみなのかもしれない。

自分にとって仕事とは？

大西「仏壇に和ろうそくを灯している間は故人とだけでなく、自分とも向き合える。私の仕事は、そんな時間を提供することなのかもしれない」

人の心を癒す炎を求め、若き職人は情熱を燃やし続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2012年8月取材。掲載内容は取材当時のものです。

映像ドキュメンタリー  
「明日への扉」をぜひご覧ください。

WebやTVなどで  
お楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧になれます。今回ご紹介した方を含め、他にも多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉

TV番組

ディスカバリーチャンネル (CS)  
冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中



Discovery CHANNEL

最新号のご案内

好評公開中

No.080

高山茶筌 茶筌師  
久保 建裕・幸子氏